日本歯科医史学会々誌・第1巻第1号（第1号～
第5号まで歯学史研究）通巻6号・昭和48年8月

兼康家の人々*

山　田　平　太**

丹波家の祖

現存の丹波家系譜には，内容の相違するところがあって，その確否を欠く．通説は，後漢霊帝5世の孫阿智王が，子の高貴王，その党をつれ乱を避けて応神帝15年（214）8月6日帰化した．

皇国医系　万年擽山著　文久元年（1861）

後漢光武皇帝11代霊帝ノ裔阿直王，高貴王父子17県ヲ牽テ帰化ス　時ニ応神天皇15年甲辰秋8月6日也

皇国名医伝　浅田宗伯著　明治6年（1873）版

霊帝五世孫曰阿智王　応神帝時　避乱牽子及其党7人帰化

日本医学史　富士川游著　明治37年（1904）

霊帝5世ノ孫ヲ阿留王ト曰フ，応神天皇ノ時帰化ス

歯科医学史　川上為次郎著　昭和6年（1931）

阿知使主は応神天皇の御代に，その子津賀使主と共に17県の民を率ひて我国に帰化し

注：阿智王―高貴王―都賀

乱を避けてとあるのは，西晋恵帝の世に8王の乱が起こり，皇族8王が互いに殺戮しあった．その31年間の争いと，頻発の北支飢饉のため世は混乱し，数多の流民を発生したことをいう．高貴王から8代目康頼は医に通じ，丹波宿弥を賜わり丹波家の祖となる，丹波家からは坂上，兼康，親康，錦小路，小森の分家が出た．

兼康家の祖

兼康家の祖については，兼康本人説と，子の能紀説がある．

医官家譜（写本）

康頼16代典薬頭左京太夫兼康，右名を以て氏とす

日本医学史

康頼ノ17世ノ孫兼康，晩ニ剃髪シテ善恭トイフ．始メテ兼康ヲ氏トス

以上は本人説を唱え

寛政重修家譜

先祖丹波康頼17代後胤兼康の子能紀の時，父兼康の名を以て氏とす

兼康の子からの説，この2説を検討すると，本人が新たに兼康家をたてるので，自分の名を善恭と改めたとみると理解できる．また子が父名を姓として新家をたてるのも合理的で，いずれかその確定はわからない．この問題は今後の宿題である．

禁裏医官の兼康家

兼康の長男定康の系統，有康，治康は口科の業を継ぎ医官として朝廷に仕えた．

橘窓自語　文化

口中医に親康何がしといふありて，今時も上京今出川小川北東角にありて，則その町を兼康町といへり，兼康に給ひて住居せし所なれば兼康町の名ありで，禁中に兼康家の実在がわかる．この地は後に親康家が領して居住した．その経緯は

慶長13年内裏にて花山院少将忠長，飛鳥井少将雅賢，猪熊侍従教利及び牙医兼康備中守等少年の輩，後宮の官女を誘出し遊会淫楽の挙動ありし由（武徳大成記）

この件で猪熊と兼康は翌年死罪となった．この事で禁裏と兼康家との関係は絶え，親康家が代わり，親康7代目光重が慶長から朝廷医官となり，世々医官を経歴している．

兼康亨純（京都）兼康祐次，兼康祐徳（大阪）の名を見るが町医である．

幕府医官の金保家

兼康の裔頼元は，その族加茂氏の元泰を養子とし，別に兼康家をたて，慶長18年（1613）徳川幕府口科医となり金保と改字した．5代目元孝は寛延2年（1749）12月に多紀と改姓して本道に転じた．

幕府医官の兼康家

兼康の子能紀の裔は6代町医，7代目弘順が元禄12年（1699）徳川幕府医官に召し出され，世襲している．家系は寛政重修家譜によると，弘順（栄庵），正隆（栄庵），

---

* The Kaneyasu Family

** 前出

弘通（栄元），公楨（栄元），公里（栄元栄順）である．

注：寛政重修家譜は，諸大名以下目見え以上の幕臣の系図と略歴の集成で，本人の申出を幕府が寛政11年（1799）に編纂を始め，文化9年（1812）に完成した．寛政末年までは記載されているが，文化以後の系譜はない．

公里の次は栄玄，栄庵で，両人の本名はわからない．

兼　康　店

明和頃の川柳「本郷も兼康までは江戸の中」で知られた本郷の兼康店は，元和3年（1617）の創業で，江戸の商店では第3番目である．兼康から5代目口中医祐元が薬種，歯薬，香具を商うて開店した．

江戸時代に「かねやす」というと，歯磨粉を意味したもので，その歯磨粉「乳香散」は，祐元が処方し，兼康祐悦が元禄時代に本郷店で販売した．当時の尖端的な流行品であって，「江戸から東京へ」（矢田挿雲著）を借りると，「咥へ楊枝で神田雉子町の丹前風呂へ通ふ途々，赤い唾を地上に吐くことを一種の見得とした」．

また「川柳江戸名物」には，「本郷3丁目より東へ切れる所を兼康横町と称したのは，其角に兼康祐悦と云ふ口中医者住居したため」とある．

「かねやすゆうげん」という平仮名づくめの看板（現存）は，堀部安兵衛が書いたもので，元禄15年（1702）12月14日赤穂義士の討ち入りした翌朝，この事が瓦版で江戸町中に知れると，見物人で本郷3丁目一帯は埋まったという．それ以来，兼康の歯磨粉は江戸中に広くゆきわたった．

祐元については，「江戸名物狂詩選」（方外道人）に「兼康祐元歯磨　柴井町　看板仮名文字白，兼康数代歯磨香，口中諸病多奇薬，尽是祐元家秘方」，「義士随筆」（山崎美成著，嘉永）にある「見せは今現に芝柴井町にあり」の柴井町の店は祐元の名で世襲し，「忘れ残り」（四壁庵茂篤著）の「芝露月町に兼康祐玄といふ薬種歯ぐすり香具等を販く見せあり」「江戸鹿子」の「源助町兼康祐玄」とあるのは祐玄の店で，享保年代の入歯師としてその名が見え，本郷店は祐悦の経営，ともに柴井町店の出店といえる．